

中西 弘樹¹:長崎県対馬へのオウムガイの漂着3例Hiroki NAKANISHI¹: Three stranding samples of *Nautilus pompilius* on beach of the Tsushima Islands, Nagasaki Prefecture, Japan

オウムガイ (*Nautilus pompilius* Linnaeus 1758) は太平洋西部の熱帯海域を中心に分布する頭足類で、その殻の内部は多くの隔壁で仕切られているため、死後殻は浮遊し、日本列島沿岸にも漂流してくることが知られている (浜田 1965; 中西 1990; 鈴木 2008など)。日本列島における漂着分布は、日本海側は能登半島まで、太平洋側は茨城県までの西南日本沿岸であり、その分布パターンは熱帯起源の漂着果実や種子と似ている (中西 1990)。しかし、その漂着はまれであり、長崎県ではこれまで長崎市三重町、北松浦郡福島町 (池崎 1971) と対馬の浅海湾 (美津島町)、厳原町豆蔵 (浦田 1976)、厳原町豆蔵西浦 (中西未発表, 1982 10.) からその漂着が知られているが、この40年間にわずか5例のみであった。しかし、2008年には対馬の3ヵ所で漂着した殻を採集することができた。オウムガイとしてはこれまでにない頻繁な漂着であるので、それを報告すると共に、これまでの記録も含めて、対馬の海岸の漂着特性について考察を行った。

漂着記録

採集したオウムガイ3点を図1に、長崎県の採集地点を図2に示した。各採集地点の概要と採集したオウムガイの殻の特徴を以下に示す。

1. 厳原町上槻: 2008 6. 22採集, 防波堤で集落と接した西向きの際海岸で、オウムガイと共にココヤシ1個, モモタマナ1個の漂着があった。オウムガイは殻長11.1cm, 殻高6.4cm, 殻幅7.9cm, 破損した開口部の内側には石灰藻類が広く付着していた。

2. 上対馬町五根緒南: 2008 10. 4採集, 東向きの際海岸で、漂着物が多く、オウムガイと共に、ココヤシ1個, ゴバンノアシ3個の熱帯起源の果実と、ルリガイ10個が漂着していた。オウムガイは殻長10.0cm, 殻高6.8cm, 殻幅7.6cm, 破損した開口部の内側には石灰藻類, イシサンゴ類, フジツボ類の若い個体が付着していた。

3. 上県町井口浜: 2008 11. 10採集, 北向きに開いた湾奥にある砂質海岸で、冬季の季節風を直接受けるため、漂着物が多い海岸である。オウムガイと共に、ココヤシ2個, ゴバンノアシ1個, モモタマナ1個の熱帯起源の漂着果実をはじめ、漂着種子から発芽したゲンバイヒルガオ12個体が生育していた。オウムガイは殻長13.3cm, 殻高8.2cm, 殻幅12.6cm, 殻の表面は紅藻類やその他の藻類が付着しており、また殻自身も色あせており、かなり長期間海水に浸かっていたと考えられる。破損した開口部の内側には石灰藻類, フジツボ類, 管虫類が付着していた。

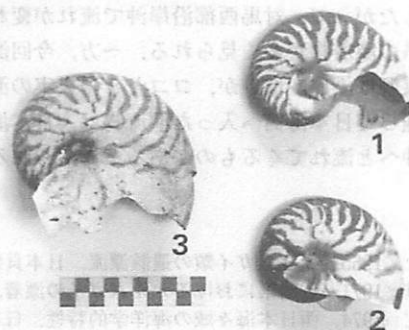


図1. 漂着したオウムガイの殻。1. 厳原市上槻, 2. 上対馬町五根緒南, 3. 上県町井口浜。

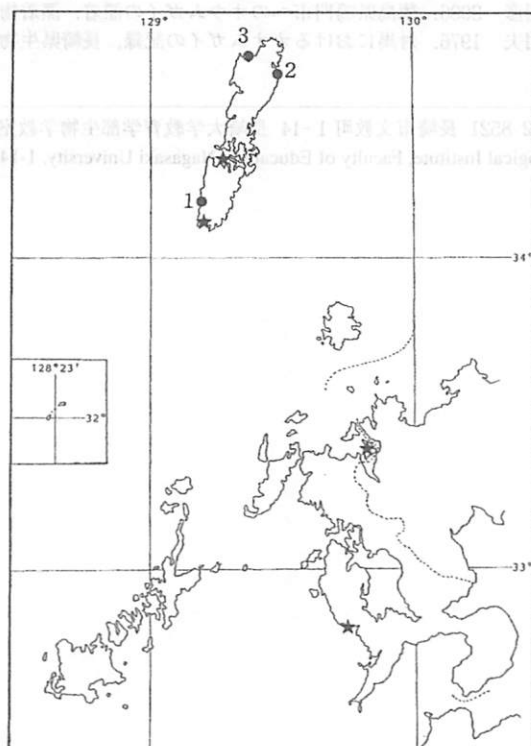


図2. 長崎県におけるオウムガイの漂着地点。★: これまで報告された漂着地点, ●: 2008年発見の漂着地点; 1. 厳原市上槻, 2. 上対馬町五根緒南, 3. 上県町井口浜。

考察

日本列島沿岸における熱帯起源の漂着物は一般に南ほど多いが、詳しく見ると必ずしもそうではなく、海流の流れの違いを反映していると考えられる。九州西岸は対馬暖流が流れ、五島列島などはその影響を強く受けており、南方からの漂着物は本土側に比べて多い。それより北に位置する対馬は、五島に比べてそれらの漂着物は少ないと考えられる。しかし、2008年における長崎県内のココヤシ果実の漂着数は約40%が対馬であったし(中西未発表)、オウムガイの漂着例(図2)からも、対馬暖流で運ばれてくる熱帯起源の漂流物は、五島列島よりも多く対馬に漂着すると言える。これは対馬暖流が五島列島付近では西部沖を流れているが、しだいに東に向きをかえながら、朝鮮半島と九州本土との間を通して日本海へと流入する(井上 1974, 1989)。しかし、その間に対馬が位置しているため、海流は2つに別れ、朝鮮海峡と対馬海峡の間を通して流入することになる。したがって、対馬西部沿岸沖で流れが変わり、漂着しやすくなると考えられる。実際に対馬の西海岸には南方系の漂着物が多く見られる。一方、今回漂着を確認した上対馬町五根緒南は対馬の東海岸に位置する。対馬の東側は浜が少ないが、ココヤシの果実の漂着や、グンバイヒルガオの芽生えも確認されている。2つの海峡を通して日本海側へ入った漂流物は、日本海中部へと運ばれるものが多いと思われるが、渦流に乗り対馬東海岸沖へと流れてくるものがあると考えられる。

引用文献

- 浜田隆士 1965. オウムガイ類の遺骸漂流. 日本貝類学雑誌24: 181-198.
 池崎善博 1971. 長崎県におけるオウムガイの漂着. 長崎県生物学会誌1: 23.
 井上尚文 1974. 西日本海々域の海洋学的特性. 日本水産学会(編). 対馬暖流. pp.27. 41. 恒星社厚生閣, 東京.
 井上尚文 1989. 東シナ海および対馬暖流域における海況特性. 長崎県生物学会(編). 五島の生物. pp.29-72. 長崎県生物学会, 長崎.
 中西弘樹 1990. 海流の贈り物—漂着物の生態学. 256pp., 平凡社, 東京.
 鈴木明彦 2006. 徳島県鳴門市へのオウムガイの漂着. 漂着物学会誌4: 39-40.
 浦田明夫 1976. 対馬におけるオウムガイの記録. 長崎県生物学会誌11: 12: 30.

(Received Aug. 12. 2009; accepted Sept. 2. 2009)

¹ 〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学教育学部生物学教室

¹ Biological Institute, Faculty of Education, Nagasaki University, 1-14, Bunkyo-machi, Nagasaki 852-8521